

神隠し

野村胡堂

一

「親分は長い間にずいぶん多勢の悪者を手掛けたわけですが、その中で何んとしても勘弁ならねエといった奴があるでしょうね」
ガラッ八の八五郎は妙なことを訊ねました。

晩秋のある日、神田の裏長屋の上にも、赤蜻蛉あかとんぼがスイスイと飛んで、涼しい風が、素裕すあわせの襟から袖から、何んとも言えない爽快そうかいさを吹き入れます。

「それはある」

平次は煙管を指の先で廻しながら、あれか、これかと考えている様子でした。

「滅多に人を縛らない親分が、憎くて憎くてたまらなかったという相手はいったいどんな野郎です」

「主殺し、親不孝、——そんなのは悪いに相違ないが、——本当に憎くてたまらないのは子さらいだよ」

「へエ——？」

「梅若丸うめわかまるの昔から、人さらいの種は尽きないが、子供をさらわれた親の嘆きを思うと、俺はこう息づまるような気がするよ、——世の中にあれほど殺生せつしょうな悪事はないな」

「そんなものですかねエ」

八五郎は長んが顎あごを撫なでて感心しておりました。

「ところで八」

「へエー」

「近ごろ俺は、誘拐かどわかされた子供を捜してくれと頼まれているんだ」
「捜してやりや宜いじゃありませんか」

「相手がよくないよ」

「へエー」

「二千二百石取の御大身、お旗本の歴々だ。町方の者をゴミ見たいに扱うから、俺は旗本や御家人は大嫌いなんだが、跡取の男の子がさらわれたとなると、気の毒でもあるな」

「気の毒がる位なら、行つて捜し出してやりましょう。金にする気でさらったのならまだ何うにかなるが、取還とりかえす手段がなきや、可哀想じゃありませんか」

八五郎はやつきとなりました。わがガラッ八は稀まれに見る女人崇拜者であると共に、かなりセンチメンタルな人道主義者でもあったのです。

「可哀想には可哀想だが、そのお屋敷には凄いお妾めかけが一人飼つてあるから、御家騒動が絡からんでいそうなんだ。土台木っ葉旗本などが御大層に——家名を絶やさないため、——云々うんぬんと勝手な理由をつけて、碌でもない子を幾腹いくはらも産うませるなんざ僭上の沙汰だよ。俺は暇で暇で仕様がないうだが、そんな揉め事もには首を突っ込みたくないよ」

「なるほどね」

平次の潔癖の前に、八五郎はいちおう承服しました。が、
「——でも、さらわれた子供と、その母親が可哀想じゃありませんか。末成うらなり冬瓜とうがん見たいな餓鬼がきでも、生みの母親に取っちゃ掛け替えはない筈で——、暇で暇で仕様がないう身体なら、ちよいと覗いてやるのも功德くどくじゃありませんか」

と、ガラッ八らしくこね返します。

「ウム、その通りかも知れないね。女の考えは女に訊くに越したことはない、何うだお静行つたものかな」

銭形平次は裏庭で張物をしているらしい、白い姉さん冠りに声を掛けました。

「八さんの言うのは尤もですよ。行つて上げたら宜いじゃありませんか」

まだ充分に若くも美しくもある恋女房のお静は、子供を持った経験はありませんが、それでも女らしく、斯う思いやりのある言葉を伝えるのでした。

「何処です、先は」

八五郎は少し乗出します。

「飯田町——餅もちの木坂の堀江頼母たのも様、二千二百石取の旗本だ。ここには奥方のお鈴さんと、お妾のお若というのがいる。堀江頼母という人は、働き者で良い男だが、中年まで奥方に子供がなかった。尤も奥方の里方は微禄して、ろくな後ろ楯がなかったために、奥方の押しが利かないせいもあったろう。五年前に妾のお若というのを容いれ、間もなく徳松という子が生れた、——川柳の『来た月を入れてはつはつ位なり』という奴だ」

「ヘッ」

八五郎は面白そうに額を叩きました。

「ところが、意地の悪いものだ、それから間もなく奥方も懐妊かいにんして、翌る年同じく男の子を生んだ。それは秀太郎といって今年四歳になる」

「——」

「跡取は歳は一つ下でも本妻の子の秀太郎と、世間でも親類方でも疑わなかったが、妾のお若というのが強^{したた}かで、殿様に油をかけて御寵愛^{ごちようあい}を一人占めにした。この女は櫓下^{やぐらした}で叩込んだ古狸で、お芋の煮えたも御存じないような、二千二百石の殿様を手玉に取るなんざ朝飯前だ」

「へエ——よくある節ですね」

「殿様は近ごろ本妻のお鈴の方に疎々^{うとうと}しくなつて、家の跡取も、年上という理由をつけて、庶腹^{しよふく}の徳松にきめるつもりらしい、——が、それでも奥方が丈夫で光っているし、嫡子の秀太郎が四つという可愛盛りで、何んにも知らずに慕^{おほ}つて来るのを見ると、妾の愛に溺^{おほ}れた殿様でも、手っ取早く決めるわけに行かない」

「——」

「煮え切らない心持で日にくつっていると、ちょうど三日前だ、門前で遊んでいた秀太郎が、いつの間にも見えなくなった。屋敷の人たちは出入りの者を狩り集めて、大騒動で捜したが、三日経つても帰つて来ない。奥方のお鈴さんは半狂乱で、三度の物も食わずに悲嘆にくれている、——何とかして捜し出してくれ、この俤^{まま}にして置いては、素姓の知れないお妾のお若の子が、由緒^{ゆいしよ}正しい堀江家の跡取に直されるかも知れない——と、用人の松山常五郎という人がやって来て、たつての頼みだ」

「そいつは行ってやらなきや男が立ちませんね、親分」

八五郎は、妙に力瘤^{ちからこぶ}を入れます。

「俺は十手を預かる町方の御用聞で、男達^{おとこたち}ややくざじゃないが、ともかく行って見るとしようか」

「そう来なくちゃ銭形の親分と言わさねエ」

「何をつまらねエ」

でも、平次はとうとう動き出しました。

二

餅の木坂の堀江家の通用門からお勝手口へ顔を出した銭形平次と八五郎は、内玄関から畳を敷いた部屋に通されて、茶よ菓子よと、思いのほかの待遇でした。

「平次殿に、八五郎殿か、よく来て下された。殿にも大層なお喜びで、くれぐれもお礼を申すようにとのお言葉だ」

用人の松山常五郎は手を取らぬばかりの喜びようです。四十六の用人摺^ずれのした人柄ですが、平次に言わせると、斯^こんなのが案外恐ろしく頑固^{がんこ}な主人思いだったりすることがあります。

「その後若様の御便りは？」

「何んにもない、困ったことじゃ」

「いちおう心得のために、御屋敷内の皆様に御目にかかりたいと思います」

「宜いとも、さっそく殿に申上げよう」

それから暫らく待たされて、若い綺麗なお小間使が、

「どうぞ此方へ――」

と案内してくれました。その頃の旗本屋敷らしく、天井は低く、窓は小さく、廊下もさして広くはなく、何んとなく薄暗い感じですが、それでも木口も立派で、よく磨^{みが}き抜かれてあり、夥^{おびただ}しい部屋部屋の調度も、一粒選りの良い品で、内福らしさが邸内一パイに漲った感じ です。

奥の一と間、左右から唐紙を開けると、脇息に寄って、三十七八の立派な武家が、ニコやかに二人を迎えました。

「平次、八五郎と申したな、いや、御苦勞であつた。倅が誘拐されては、家内の恥辱になることじゃ、それに奥の悲嘆が見えてられない、何分頼むぞ」

二千二百石取りの殿様にしては如何にも如才ない調子でした。「精いっぱい、お捜しいたします。就ては、御屋敷の内外を、自由^{つひ}に調べさして頂きとうございますが――」

「ああ、宜いとも、何分よろしく頼むぞ」

口をきいたのはたったそれだけです、平次は満足した様子で引下がりました。

続いて奥方の部屋、これは縁側から廻って声を掛けると、

「まア、よく来てくれました。どんなにお前方の来るのを待ったことか――」

そう言つて端居にでてきたのは、三十五六の、少し淋しいが、美しいというよりは、清潔な感じ^{せいけつ}のする、品の良い奥方でした。

「お氣の毒でございます。出来るだけのことは致しますが、少しばかり、お話を願いたいと存じますが――」

「宜いとも、何んなど遠慮なく」

「若様はときどきお一人で御門の外へ出られるのでしょうか」

「何んと申しても子供のことでですから、召使^{めしつかい}にはよく見張るやうに申付けてありますが、ときどき一人で外へ出て、近所の子供衆と遊んでおります。ことに隣りの荒物屋の子と親^{した}しいやうで――」

「人見知りをなさらない方で？」

「ええ、誰にでもよくなつきます」

「不斷御屋敷では誰と一番よく遊んでいらっしやいました」

「小間使の吉や、若党の三次と仲がよかったようで」

「お屋敷の外の方では？」

「荒物屋の子ぐらいのものでしょね、外には心当りがありません」

話はそれだけでした。良い加減に切上げると、

「どうぞお願い申します、あの子が帰らなかつたら、私――」

あとは袂たもとに顔を埋めて、障子の内に入ってしまったました。

次はお妾めかけのお若の部屋、それは奥方の部屋よりも明るく大きく、庶腹しよふくの子の徳松が、玩具がんぐを部屋一パイに散らばして遊んでおります。

「御苦労ねエ、飛んだ人騒がせをして」

そう言うお若は、二十七八のそれは派手な女でした。少し肥り肉じしで、色の白い、媚こびを含んだ、妙に素気ない物言いも、思わせ振ふりなところがあって、男を焦立たせずには措かないと言った質の女です。

側で精いっぱい玩具を散らばして遊んでいる児は、大柄でお人形のような造作をした顔ですが、何んとなく愚鈍ぐどんそうでもあります。

この女から何を訊いても恐らく正確な答えを得ることがむずかしいと思ったか、平次はそれっ切り引下がりました。

あとは用人の松山常五郎をのぞけば、一季半季の奉公人ばかりです。そのうちの一人、先刻案内してくれた綺麗な小間使は、お吉と言って十九、房州から行儀見習に上がっているそうで、

「私は何んにも存じません。でも奥様がお可哀想です、若様もに若

しものことがあったら、生きては居らっしゃらないでしょう。――若様は何方かと言えば疳かんの強い方で、滅多な人にはなつきませんでした。お屋敷の中でもお相手のできるのは、私と若党の三次さん位のもので、外には荒物屋の子がときどき遊びに来ましたし、御親類方では、奥様の御妹様――お浅様にはよくなついていらっしやいました」

「そのお浅さんとやはは何処にいるのだ」

「市ガ谷でございます。もう三十を越した方で、御不縁になって奥様のお里にいらっしやいますが、――お里方と申しても、今では弟様御夫婦の世帯だそうで」

ここで平次は、奥方と小間使の言葉の間に大きな喰い違いのあることに気が付きました。

「若様とお部屋様（お若）の間は？」

「お仲は宜しい方でございました。お二人の若様がごいっしょに遊ぶので」

「――」

「滅多な人にはなつかない若様でしたが、お子様はやはりお子様同士で、徳松様と御いっしょに遊びたさに、お部屋様（お若）の仰しやることはよく聴いたようでございます」

お吉はよく話してくれました。何となく気軽きがるな好感の持てる娘です。

つづいて逢った若党の三次は、三十前後の色の浅黒い小柄な男で、

「あっしは何んにも知りませんよ、若様とは大の仲好しでしたがね、これは何処の子供衆も四角几帳面きちようめんなことを嫌いだからで、何

んの不思議ありません。え、若様は、滅多な人とは口もききません」

そんな事を言う調子が、妙に掛引が強そうで、渡り者らしい強したたかな感じです。

「それから三日の間に変わったことはないのか——若様が見えなくなっただけだ」

「奥様が築土八幡様へお詣りに行っただけです——え、昨日でしたか、御神籤おみくじを引いたら凶きようが出たとかで、ひどく萎しおれていらっしやいましたした」

「お供は？」

「お一人のようでした」

三次が済むと、あとは下女のお仲に、飯炊めしたきのお六、どちらも在郷者ざいじやうもので、若様紛失とは関係がありそうにも見えません。が、ただ二人の口から、若様の行方不知しれずになった夕刻、屋敷から外へ出たものは一人もなかったことだけは確かめました。

「八、市ガ谷に廻って、奥方の里方にいる妹さんに逢って見てくれ。それから帰り築土八幡様に廻るんだ、きのう武家の奥方が参詣したときの様子——誰にも逢わなかったか何うか、それを訊くんだ」

「へエ——」

「それからもう一つ、あのお妾めかけの身許を洗ってくれ。あの女は素姓のうるさい女に違いない、——と、もう一つ、若党の三次も唯の奉公人にしちや眼端が利き過ぎるようだ。誰か下っ引をやって、請人を調べさせてくれ」

「親分は？」

「俺か——ハッハッ、俺に用事がなくなるのが不足だといふのか。心配するな、荒物屋の倅に逢って、最寄の玩具屋おもちゃやと駄菓子屋をしらべて家へ帰って昼寝をしながら考えるよ」

「人さらいなら、江戸から出さないように、四宿と船の出入りを見張らなきゃなりませんね」

八五郎は常識的なことを言います。

「三日も前のことだ、江戸から連れ出すものなら、もう箱根を越しているよ。だがな八、若様の秀太郎とかは、あまり良い子柄ではなかったようだ。疳かんが強く、人付きが悪くて、父親にまであまり可愛がられてはいなかった、人さらいの狙うような玉じゃない。もしまた金にする気で狙ったのなら、とうに何んとか言ってくる筈だ。こいつは間違いもなくお家騒動さ」

「成程ね、そんなもんですかねエ」

ガラッ八の定石は一ぺんにけし飛んでしまいました。

三

その晩、平次の家へ八五郎がやって来たのはもう大分更ふけてからでした。平次はそれまで珍らしく女房のお静を相手に、晩酌ばんしゃくの追加などをして、待っていた様子です。

「あ、くたびれた、——江戸中を二三遍駆け廻ったような心持ですよ」

「御苦労御苦労、まア一杯やりながら話してくれ」

子分思いの平次は、自分で立って盃などを出してやります。

「パイ一も有難いが、それより腹へ底を入れなきゃ、呑んだよう

な気がしませんよ。朝っから蕎麦を二杯食った切りで、山の手一円から、芝まで駈け廻ったんで——」

「呆れた野郎だ、また空っ尻か」

「お察しの通りで」

「お上の御用で、いづどこへ飛ぶかわからない身体だ、せめて二朱なり一分なり、要心金は持って居るものだよ、それが御用聞のたしなみだ——と言っても、俺も三百も持っていないことはあるがね」

平次はそう言って苦笑いするのです。

「ところで、斯うでしたよ、——奥方のお里方へ行って見ると、妹のお浅というのが、あっしの胸倉を掴まなればかりに、お願いだから一日一刻もはやく若様を捜し出してくれ、誘拐した奴は大方わかつているが、いずれ若様を亡きものにするに違いない——という騒ぎなんで、あの女は、姉の大事な子をさらったのは、お妾の廻しものに決めている様子です」

「それから」

「——若様の行方不知になったのは、堀江の屋敷から人が来て、その晩のうちに聞いたそうです。もう一つ、奥方はきのう確かに築土八幡様へお詣りに行って、御神籤を引いていますよ。あの通り目に立つ人で、多勢が見ています。尤も御神籤所で訊くと、奥方の抽いた御神籤は凶でなくて吉だったそうで、少し変じゃありませんか」

「フーム」

平次は唸りました。何んか知ら妙に喰い違いの多い事件です。「お妾のお若というのは、櫓下で鳴らした強か者で、引抜くと尻

尾が九本生はえている代物ですよ。あの兄貴だと言って餅の木坂の屋敷に出入りしている林次とか言う男だって、兄貴だか何んだかわかったものじゃありません。それから若党の三次、あれは親分のお察しの通り、仲間では評判のよくない渡り者で、三道楽に身を持崩した、大変な代物ですよ」

「よしよし、それでいろいろのことが判ったよ。俺の方はまるっ切り不漁しけだ——荒物屋の倅の時次郎は、はにかんで何んにも言わないし、神田から番町へかけての、玩具屋にも駄菓子屋にも何んの変りもない。仕方がないから家へ帰って一生懸命考えたよ」

「結構な智恵が浮びましたかえ」

「うんにゃ、智恵の方も不漁しけだ。明日もういちど餅の木坂へ行つて、調べ直して見よう」

平次はそう言って、大きな欠伸あくびをするのでした。

事件はしかし、翌る朝を待ちませんでした。

その晩平次は、

「銭形の親分さん、お願い申します。夜更けになって相済みませんが、餅の木坂の荒物屋から参りました」

遠慮勝えんりよがちではあるが恐ろしく緊張した様子の声と、格子をたたく音に眼を覚されてしまったのです。

「何んだえ、餅の木坂の荒物屋で何うしたんだ」

入口の狭い三畳に泊り込んでいた八五郎が飛び起きました。

「倅が夕方から見えなくなりました。八方に手をわけて心当りを捜しましたが、何処にも見えません。堀江様の坊っちゃまのこともあるので、あのお屋敷の御用人に伺ってお願いに参りました。まことに申兼ねますが、一粒種ひとつぶだねの倅一人を助けると思召おぼしめして、お

願いでございます」

傾いた月明りに透すかして見ると、三十五六の実直かたむそうな男が、格子に縋り付いて泣かぬばかりに訴えているのです。

「そいつは氣の毒だが、もう夜明けに間もあるめえ。後から行って見るから、先へ帰って待ってくれ」

「そう仰しやらずに親分」

斯うしているうちにも、五歳になる俵の時次郎が、恐ろしい速力で自分たちの手の及ばぬところへ飛んで行ってしまおうとも思い込んでいる様子です。

「八、そんな氣の長いことを言わずに、今すぐ一緒に行って見てやるが宜い、俺も後から追いつくから」

「へエ——」

隣の部屋から平次に声を掛けられると一も二もありません。八五郎は寝足らぬ顔を水で洗って、荒物屋の亭主と飛んで行きました。

飯田町へ駈け付けて見たところで、八五郎が出洩でしよったのも無理はなく、夜の明けぬうちは、何処を捜して見る当てもありませんでした。

「いつものように、薄暗くなるまで外で遊んでいました。五つと言っても智恵も柄も六つ七つに見える方で、夕方の忙いそがしいときは、よく一人で遊んでおります。お隣の堀江様の坊っちゃんかどわかが誘拐されたという話も聞きましたが、あれは身分の方のことで、手前どもの汚きたない餓鬼をさらったところで、百文にもなるわけはなく、安心して眼を離していたのが間違いでございました。こいつはやはり神隠しとでも申すようなものでしょうか」

亭主と女房はひどい興奮と焦燥しょうそうにかり立てられて、交かわる交がわるこ
う語るのでした。

「江戸の真ん中で、そんな馬鹿なことがあるわけではない。いずれ
人間の仕業だろうが、日頃子供を手なずけている者に心当りはな
いのかな」

「一向心当りはございません。どなたにでもよくなつく子で、
平常ふだんからそればかり心配して、知らない方と、一緒に遠くへ行か
ないよう、うっかり物などを貰わないようにと言ふくい含めておきま
したが――」

女房はそう言いながら、自分の不行届を責めてさめざめと泣く
のです。

そこへ平次も駆け付けましたが、さて手の下しようもありません。

四

その日の昼過ぎ、荒物屋に一通の手紙を投げ込んだ者がありま
す。取込んでいた時で、その風体も判らず、小僧が後で店の土間
で拾って騒ぎになりましたが、その時はもう投げ込んだ者の姿も
なく、お隣の堀江家の通用門へ女の姿がチラと隠れたのを見た
という者もありますが、あまり当てにはなりません。

手紙は小菊こぎくを一枚、小さく畳んだもので、中には文字がたった
三行、(編注)

子どもは しばらく あずかる

心配無用 いのちに別条はない

と斯う書いてあるのでした。相当に書ける筆跡てを隠して荒々しく書いたもので、

「氣をつけて見るが宜い、乱暴に書きなぐっては居るが、角々の滑らかな、仮名書きかながの癖くせと、妙に優しいところがあるだろう。これは間違ひもなく女の書いたものだ」

平次はそう言うのです。

その日一日頑張つて見ましたが大した収獲もなく、平次は八五郎だけを残して自分の家へ引揚げました。

その晩も遅くなつて歸つて来た八五郎の報告によれば、荒物屋の方は何んの変つたこともなく、堀江家の方は、姉の奥方を慰めに来たという妹のお浅が、日が暮れてから歸つて行きましたが、間もなく若党の三次が、それを追うように出て行き、西刻半頃むつはん（七時）お妾のお若の兄という林次がやって来て、一刻近くお若のところで油を売つて歸つたというのです。

「持つて来た品か、持出した品はないのか」

平次は妙なことを訊きました。

「お浅が小さい風呂敷包を大事そうに抱えて行きましたが、あとは空手からてで、人間一人隠して持込んだ様子はありませんよ」

八五郎は先をくぐつて斯んな事を言うのです。

その翌日は、今度は堀江の屋敷から出入りの職人が宙ちゆうを飛んで来ました。

「大変、親分、すぐ来て下さい」

「何んだ、何が大変なんだ」

居合せたガラッ八が、親分の真似をして妙に落付き払います。

「若党の三次が殺されたんです」

「何？」

「お屋敷の塀の外で、辻斬にでもやられたんでしよう、真っ向から梨割なしわりに斬られて死んでいました」

「そいつは大変だ」

ガラッ八もさすがに驚きましたが、平次はその掛合を隣の部屋で聴くと、早くも支度をして出て来ました。

「行って見よう、八」

「へエ——」

親分と子分と、それから使の者は、物をも言わずに飯田町へ飛んだことは言うまでもありません。

若党三次の死骸は、堀江家裏手の塀外にありました。

町役人が二三人と、掛り合の近所の衆と、それに堀江家の用人松山常五郎が出て見張りをしておりますが、どう処置したもののか、くふう工夫に余って、睨み合いのまま時が経って行く様子でした。

「御免、検屍前によく見て置き度たい」

平次は筵むしろを取りました。その下にある死骸は、醜みにくい恰好に崩折れた若党の三次で、小意気な男前も斯うなつては惨憺さんたんたるものです。傷は脳天から二三寸斬下げた凄わざい業、恐らく声も立てずに死んだことでしょう。

「正面からこれだけ斬るのは親分」

「三次が油断をする相手だ、そして凄腕前だ、——少し血が少ないとは思わないか」

「そう言えばそうですね」

平次と八五郎はこんなことを応酬おうしゅうしております。

「昨夕三次はどこへ行ったんでしよう」

平次は用人の松山常五郎に訊ねました。

「毎晩のことだから、わからないが、いずれ何処かの賭場へでも潜り込んでいたことと思うが」

松山常五郎の調子には、ひどく三次をこきおろすような響きがあります。

「遅く帰った時はどこから入るんです」

「通用門の潜戸はいつでも開いているよ」

「念のためにお屋敷の中と、三次の部屋を見せて下さいませんか」

「あ、宜いとも」

松山常五郎が案内して堀江の屋敷に入りました。

潜戸を入れて二三十歩行くと、新に芝地を掘り返した畑で、鍬の跡も生々しいところへ、白いものが一つ落ちております。

拾い上げて見ると、それは子供の玩具——ろくろ細工に彩色をした兎、しかもその兎には、少しばかり血さえ付いて居るではありませんか。

「近所の子がよく御門内へ入るから喃」

松山常五郎はそれを見て、弁解らしく言います。

三次の部屋は何んの変哲もなく、持物もひどく少ないのですが、不思議なことに押入から引出した行李の中からは、紙に包んだ小判が十枚ほど出て来たのです。

「たいそう工面の良い男ですね」

年に四両の若党の給料では、十両溜めるのは容易のことではありません。

それに、

「三次は勝負事が好きだと言ったね」

「勝つて来た十両かも知れませんよ」

「この紙の匂いを嗅いで御覧、勝負事で儲けた金を、こんな紙に包む奴があるだろうか」

「へエー、こいつは女の匂いですね」

八五郎は大きい鼻をヒクヒクさせて居ります。

紙には高価な化粧品——せんによこう仙女香あたりでなければ真似られない匂がしみ込んでいたのでした。

五

平次はその間に、多勢の下したつ引びきと八五郎を動員して、妾のお若の身許と、その兄と言ってる林次の素姓を念入りに洗いました。

「二人の子供の方は何うなるんです」

「それも追々わかるよ」

「堀江の殿様が、——今まで、お妾の子にばかりチャホヤして居たのが、奥方の子がさらわれてから、急に——秀太郎の行方はまだわからぬか、秀太郎はどうしたろう——とそればかり心配するようになった様ですよ、妙なものですね」

「それが親心というものだろう。——ところで、今晚俺といっしょに市ガ谷の奥方のお里まで行ってくれ」

「何があるんです」

「何んでも宜い、その時になればわかることだ」

平次はそんな事を言つて八五郎の好奇心を釣つております。

その晩市ガ谷の月岡某の浪宅——堀江たの頼母の奥方の里方に集まったのは、堀江の奥方お鈴、妹のお浅、弟の月岡某夫婦、それ

に堀江家の用人松山常五郎と、銭形平次、その子分八五郎の七人でした。

八畳の質素な部屋に、首を鳩めるように並んだ六人は、何を切出すかわからぬ、銭形平次の話に固唾を吞みます。

「さて、皆様、わざわざお集まりを願ったのは、お頼みの堀江様若様、秀太郎様と、荒物屋の伴時次郎の行方がわかったからでございます」

「――」

六人は居ずまいを直して互に顔を見合しました。

「本来ならばお屋敷へ申上げるところですが、その前に心得のため皆様の御耳に入りたいと存じ、ここにお集りを願いました」

平次は何んの巧みもなく、いとも平淡に話を進めました。

「若様は――母御様は人なつつこいと仰しゃいましたが、どちらかと申すと疳のお強い方で、減多な方といっしょに、何処へもいらっしゃる筈もなく、あの晩お屋敷では外へ出た方もないところを見ると、外から若様を音も立てずに伴れ出せる方は、たった一人しかございません」

「――」

ハッと首を垂れたのは奥方の妹のお浅でした。

「これは奥方とお話合ひの上で伴れ出しなすったことで、――奥様が翌る日外へ出られたのは、若様とお逢いになる為であったと思います。そして築土八幡様へお廻りになって、御神籤をお引きになった、御神籤は吉であったのに、凶であったと仰しゃいました。――そればかりでなく奥様のお嘆きは、大袈裟ではありませんが、決してお人柄相応のものではなく、多分にお芝居があった

ように見受けました」

「――」

平次はズケズケと言って退けます。今度はハッと首を垂れたのは奥方のお鈴でした。

「その翌日にお浅さんが飯田町のお屋敷へ来られたのは、若様がむずかるので、玩具を持って行く為だったと思います。四つになる若様はなかなか撫め切れ^{なだ}ない、現にその前の日は、日頃仲好しの荒物屋の倅をつれ出して当分若様のお相手をさせる氣になった――これは少しやり過ぎでした」

「――」

「このいきさつを嗅ぎ出した若党の三次はたぶん奥方を強請^{ゆす}つたことでしよう。まず十両の金はお渡しになったが、二度目の時は、お浅様のあとをつけて若様を隠した場所を突きとめ、若様の玩具――ろくろ細工の兎を持って来てこんどは御用人をゆすった。御用人はさいしょこの細工を知らなかったがだんだん聴いて見ると奥方がお気の毒になり、それにつけても三次の悪党振りに我慢がなり兼ねて、裏へつれ出して切つて捨てた。真っ向から斬つたのは、あの月夜では懇意なものでなければならず、腕の冴^{さえ}から見て、私は御用人のほかにはないと見抜きました」

三人目、用人松山常五郎は黙つてうなずきました。

「血の跡を隠すために、芝地を掘返して、急に畑にし、死骸は堀外へ取捨てられたが、血の付いた玩具までは氣がつかなかった」

「――」

「如何でしょう。この平次の申上げたことに違ったことや足りないところはないでしょうか。私は町方の御用聞で、御大身の

御旗本の内証事ないしょうじにまで、口を入れたくはございませんが、せつかくのお言葉で、これだけ調べ上げました」

平次は静かに言い終ります。それを待っていたように、「一言もない、まさにその通りだ。万事はこの松山常五郎の不行届から起ったこと、御免」

「ま、待っておくんなさいまし、二本差は、すぐそれだから大嫌いさ。ね、松山様、腹を切ったって、納まるおさものは納まり、納まらないものは納まりません。それより何もかも打明けて、ここまです追い込んだ奥方の御難儀を救う気になりませんか」

平次はあわてて留めました。この松山常五郎という用人は、平次の鑑定通り見かけに寄らぬ純情家だったので。

「平次殿、許して下さい。皆んな私が到らぬから起ったことでございます」

奥方は膝の手を滑らして、畳の上へ崩折れました。

誰にともなく詫びたい心持でしょう、重そうな頭を幾度も幾度も下げると、はふり落ちる涙が畳を班々はんはんと濡らします。

「妹には、若（秀太郎）が毒害されるかも知れないから、しばらく身を隠させるようにと頼みましたが、実は——実は——」

「――」

奥方は言い渋しぶりましたが、挙げた顔が平次の熱心な瞳に逢うと、思い切った調子で、

「そうでもしたら殿様が、若（秀太郎）やこの私を不憫ふびんと思って下さるかしたら、浅墓な心持でやったことでございます。何んという馬鹿な私だったでしょう。そのために荒物屋夫婦にも嘆うしなきをかけ、若党の三次は命を亡うしないました。私はもう、私はもう」

奥方は唯ひた泣きに泣くのです。

「よくわかりました。御心配なさいますな、平次は胸一つに畳んで、この事は生涯しょうがい口にも出しません。若様と荒物屋の子が、神隠しになっていたことにし、今晚築土八幡つくど様の境内で見付けて来たと云つて、お屋敷へおつれなさいまし」

「それは本当かい、平次。そしてこの私は、罪の深いこの私は？」

「何んの、罪も、糸瓜へちまもありやしません。夫の心を確しっかと押えて、本妻の格式と、一粒種の子供を護り通そうという女には、それ位のことは許されて宜い筈です。若党の三次は旧悪の酬むくいで、強請ゆすりそこねて斬られたに違いありません。誰が奥様をとがめるものでしょう」

「有難い、平次、この御恩は」

奥方も、お浅も、用人常五郎までが思わず手を合せるのでした。「拝んじゃいけません、仏様にされるにはまだ早い、——ところで、お妾のお若、あの女の悪い素姓をすっかり洗い出しましたよ。林次というのは兄貴ではなくて、櫓下やぐらしたにいる頃からの深間で、今では亭主も同様です。あの子——徳松だつて、誰の子だかわかったものじゃありません。こいつは奥方のお口から申上げ悪にくいでしょうから、動かぬ証拠を揃えて、あつしから殿様へ申上げましょう」

一座はただ、感激にひたつて言葉もありません。

「サア、八、供揃いだ。若様を守護して、餅の木坂のお屋敷へ帰るんだ。——今晚にも殿様にお目通りを願つて、これに懲こりて安妾なんか置かないように申上げよう、神罰はあらたかだぜ」

平次は斯んな事を言いながら、しょんぼりと留守宅に平次の帰

神隠し

りを待っている、恋女房のお静のことを考えていたのです。

(編注)

底本では「三行」と書かれているにも関わらず、手紙の引用文は二行になっていますが、初出時も二行の文面なので底本のママとしました。ただし、文面の改行箇所は初出に準じて改めました。作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

底本では本編の初出を「昭和二十二年（オール読物十月号）」としていますが、現物確認により昭和二十一年十一月号に改めました。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール読物」昭和二十一年十一月号 文藝春秋新社

底本―「錢形平次捕物全集」第八巻 河出書房 昭和三十一年八月十五月初版

編集・発行 錢形倶楽部